

---

# りんぷんのあと。

ナナエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

りんぷんのあと。

### 【Nコード】

N4192Z

### 【作者名】

ナナエ

### 【あらすじ】

本編「地獄蝶が泣いたとき」の番外編。本編で語られなかった話を短編形式で載せていきます。作者が多忙のために（あと「die and locus」という長編、その番外編を掛け持っているために）、更新は亀以下のスピード。これを読まなくても本編の物語を読みすすめるのに支障はありません。

元々番外編はやっていく予定がありませんでしたが、有難くも様々な方から要望がありましたので、書かせていただく次第となりました。よろしくお願いします！

太陽のような　く前く（前書き）

本編「地獄蝶が泣いたとき」の、序章と第一章の間の物語です。

太陽のような　く前く

すまぬ。

すまぬ。一護。

貴様が死にかけたのは、私のせいだ。

I was wondering if you could  
understood my mind .

「もう心配はいらなんでしょう。傷もふさがり、あとは意識を取り戻すのを待つだけです」

そう言われ、心底安堵するルキア。

卯ノ花に向け、深深と頭を垂れた。

「ありがとうございます」

「いいですよ、お礼なんて」

大変でしたね、と笑いかける。

「それで、一護は……」

「この奥の部屋ですよ」

もう一度、卯ノ花に感謝の会釈をすると、その横を通り過ぎ、彼がいる病室に入った。

日が照り出してくれていて、部屋の中は明るく、あたたかい。足音を立てずに、ベッドにゆっくりと近づいた。

そこには、青白い顔のまま眠っている、黒崎一護の姿がある。

「……………」

彼の呼吸は浅くもなく、ただひたすら目を閉じているだけ。

そのうち目を覚ますであろうに、ひよっとしてこのまま固まって、二度と瞼が開くことはなくなるのではないかという恐怖があった。

『ありがとな』

歯を食いしばる。そうしていないと、自責の念に絡み取られて、涙が零れそうだった。

『おかげで、心はここに、置いていける』

…だめだ。

ルキアは頭を振った。

だめだ。あんなこと、二度と起きてはいけない。

志波海燕。ルキアの、かけがえのない師。

お気楽で、無邪気で、妙に子供っぽくて、なのに優しく、鋭くて、近くにいるとあたたかくて…。

太陽のような人だった。

二度も、太陽を自ら覆い隠すほど、自分は愚かでないと思いたい。皆を照らし出す太陽が消えれば、世界は冷え切る。そういうものだ。この黒崎一護も、また、太陽のような存在なのだ。

海燕と比べれば、どこかまだ不器用な陽の注ぎ方で、しかし必死に、皆に平等にふりかけようとしている。だから皆があたたかくなれるのだ。

ゴン、ゴン。

壁を叩く音がして、振り返ってみると、恋次が立っていた。

「よっ」

手を挙げ、近づいてくる。彼も、一護の容体を案じて、幾度も総合救護詰所に足を運んでいるらしいことは、白哉を通じて知っていたが、ルキアが長居しているために見事時間が合ったようだ。

「卯ノ花さんから聞いたぜ。もう大丈夫なんだってな」

「ああ」

恋次から視線を外す。

彼はルキアの横に並び立ち、眠る一護を少し覗き込んだ。

「本当、しぶてえよなあ、コイツ。どーせ死なねえなら、とっとと起きりゃいいのにな」

軽い口調だが、その目は少々心配そうな光が見える。

意識を取り戻していない一護は、顔色が悪く、眉間の皺もいつもより随分深く刻まれている。いっそ、死んでしまったほうがもう少し楽そうな顔になるのでは、というほどだ。

「ああ。全くだ」

ルキアは腕組みをして、頷いた。

その後の僅かな沈黙の後、彼女は恋次の方を見る。

「どうして一護は、死にかけておったのだ？」

「……はあ？」

質問の意図が読み取れず、眉根を寄せる。

「何故一護は人間なのに、戦っておるのだらうと、考えていたのだ。こやつが意識不明で、十日間面会謝絶の状態で、集中的な治療を受けていたときから、ずっと」

俯いて、目を閉じる。

「いくら護るといっても、だからといって、一護に戦う必要があるとは思えぬのだ」

分からない。否、分からなくなってしまった。

一護はどうして、戦っている。

護ることは即ち、戦うことになるのか。本当に、そうなのか。

いや、護ると言っても、戦う以外にあるはずだ。一護には、ユウレイが見える。そのユウレイも、優しく触れてやることで成仏させ

てやる。それで充分、そのユウレイを「護った」といえるはずだ。もっと言ってしまうなら、一護には、ユウレイではなく、学校の友達や、かつて尸魂界に共に乗り込んできた人間の戦友や、家族がいる。きっとこれから、彼女もできるだろうし、やがては子供だってできる。全てが護る対象で、それは、彼がただそこにおいてあげる、というだけで充分、「護る」ことに値するはずなのだ。果たしてそこに、一護にしか見えない「化け物」…「虚」<sup>ホロウ</sup>を滅するべく戦って「護る」ことは、必要なことか。それはその護るべき対象の彼等からして、「護ってもらっている」ことになるのか。

何の罪もない人間が、どうしてこう何度も死にかけなければならぬ。

答えが、見えない。

……死なせたたく、ない。

「……ルキア、お前……」

恋次の言葉が続く前に、ルキアは彼の腕にポンと手を置く。

「いや、深い意味はないのだ。忘れてくれ」

彼女はそのまま、一護の病室を辞した。

## 太陽のような 前（後書き）

色々な方から要望がありましたので、とうとうやっちまいましたよ  
この作者は。

「地獄蝶が泣いたとき」の、番外編です。わーい。

何から書こうかな、と思ったのですが、とりあえずは元々、ウチの  
頭の中にあつた、「一護から死神の力を奪う」ということをルキア  
がしよう、と考えるようになるまでにあるお話を書こうかな、と思  
いました。

初っ端から一護が生死の境をさまよっているようなそんな状況。一  
応、卯ノ花は大丈夫だと言ってますけど。ちなみにここから一護、  
実は一ヶ月近く昏睡状態のままです。それは後編で書けるかな。

あ、この「Ass Sun.」、前中後の三本で完結し  
ますよ。

それでは、忙しいので更新ペースがよろしくないのですが（「di  
e and locus」優先でいくので余計に遅いです）、よけ  
ればよろしく願います！

それでは、これにて。

感想、アドバイス等お願い致します！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4192z/>

---

りんぷんのあと。

2011年12月14日16時56分発行